

発行責任者：三枝 大輔

編集責任者：細谷 仁人

HEADLINE

●これまでのモンゴルとの交流が毎日新聞で紹介されました！

6月21日(金)の毎日新聞で、当ユニオンのモンゴルとの交流について、記事が掲載されました。

記事には、モンゴルとの交流が始まったきっかけから、これまでの4度に亘る図書贈呈団の交流について紹介されています。

先日6月4日に帰国した第4次図書贈呈交流団の交流状況の写真も掲載されています。

これまで諸先輩方が取り組まれてきたその意思を引き継ぎ、続けることの大切さ、人と人とのつながりの大切さを今回の新聞記事への掲載で改めて感じることができました。

是非ともご一読いただき、御家族の方にもご紹介いただければと思います。

また、お近くに贈呈交流団のメンバーがおられましたら、旅の感想等を聞いてみてください！

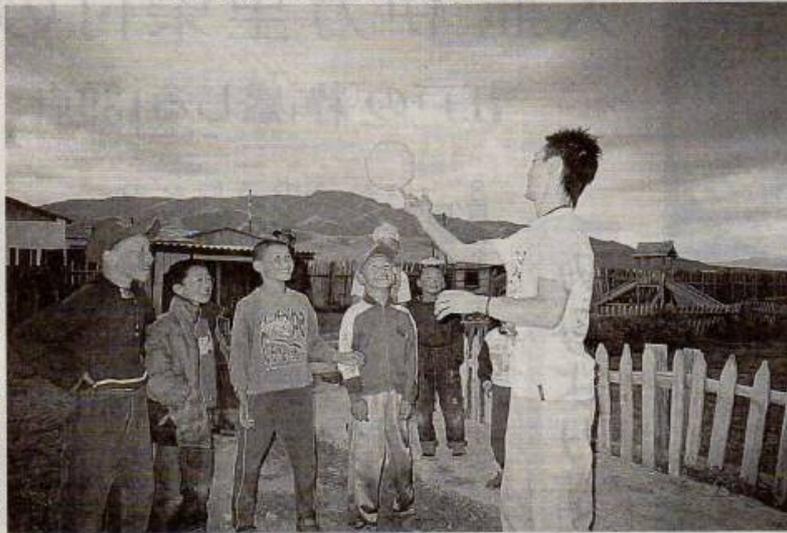
これからもこの活動が未永く続いていけるように、モンゴルとの交流について考えていきたいと思っております。

(※毎日新聞の記事については、裏面をご参照ください。)

—END—

モンゴル 本贈り現地 で交流

冷水真吾さんの指導にモンゴルの子どもたちは目を輝かせていた
—04年撮影、いずれも神鋼環境ソリューション労組提供



阪神大震災(1995年)でいち早く救済物資を被災地に提供してくれたモンゴルと、草の根交流を続ける労組がある。神鋼環境ソリューション労組(神戸市中央区、川端健執行委員長)。2004年、最初にモンゴルを訪問して交流の芽を作ったが、不慮の事故で亡くなった仲間の生きた証しにと、現地に本を贈り続ける。先月下旬、4回目の交流団が訪問。現地の子ともちふれあい、亡き仲間への遺志をつないだ。

【桜井由紀治】

「神鋼環境労組」遺志つなぐ

交流団は持久走などでモンゴルの子どもたちとふれあった



阪神大震災の恩返し、部主将の冷水さんは、をしようと同労組は04年5月、現地では高価な本を贈ることを支援の柱にして第1次交流団をオプス県マルチン郡に派遣。歴史書や文芸書など約150冊を贈った。そのメンバーの中に故冷水真吾さんがいた。バレーボール

部主将の冷水さんは、子どもたちにバレーボールも指導、子どもたちには目を輝かせ競技を楽しんだ。



交流団メンバーとすっかり打ち解けるモンゴルの子どもたち

訪問は3年ごとに行われ、交流を深めていった。本の購入費は組合員がバザーや古本市を開いて収益を充てた。しかし、第2次

交流団が訪問した07年の12月、冷水さんが事故死した。27歳だった。初めてのモンゴル訪問で心を打たれ「大きくなっていく子どもたちをずっと見ていけたらいいな」と語っていた冷水さん。翌年、両親は「子どもたちに」とバレーボールを贈った。10年5月の第3次交流団には両親も参加。現地関係者は冷水さんを悼み、贈呈された本を収蔵している図書室を「冷水真吾記念図書室」と命名。郡民全員で大切に使うことを誓った。

第1次交流団の冷水さんが指導して以来、すっかり盛んになったバレーボールの交流試合。交流団は、使い込まれたボールを見つけた。冷水さんの両親が贈ったものだった。子どもたちが大切にしていることを知った。

約150冊の本のほか、スポーツ用品などを贈った交流団は、地域を挙げての歓迎を受けた。子どもたちは歌や踊りで感謝の意を表した。折り紙やそろばんを使った交流や持久走大会、モンゴル相撲などでふれあい、住民は交流団をゲルに招き、ごちそうしてくれた。

て、広がる草原に移動式住居「ゲル」が点在する。